



ミュージアムコラム

2020年3月16日、着物類2,519点を含む「武庫川女子大学近代衣生活資料」(9,092点)が国の登録有形民俗文化財になっています。附属総合ミュージアムでは1年を通して、季節ごとに様々なテーマで資料をピックアップし、1階ロビーにて展示をおこなっています。

2023年度夏季企画

“涼”を感じる

2023年7月6日(木)～8月31日(木)

「涼」をとるため、^{あお}煽いで風を起こす道具である「扇」は、高温多湿の日本において、真夏に必須の携行品でもあります。「扇」とは、^{ひのき}檜の細い薄板を紐で^{ひおうぎ}繫いだ檜扇や、竹製の骨に紙を貼り付けて絵を描いた紙扇など、日本で創始された扇子(倭扇)を思い起こされますが、本来は中国起源の団扇を指す言葉でもありました。

夏季企画展では「“涼”を感じる」をテーマに、扇子4点、扇面文の名古屋帯と帯地反物、団扇散らし文の長着を展示しています。暑い夏に涼しさを感じ取っていただければ幸いです。



扇子

今回、昭和後期から平成にかけて制作・使用された扇子を展示しています。扇子4点のうち、2～4の3点は竹尾千代氏という方の親族からのご寄贈によるもので、どれも上品で素敵ですが、特に目を奪われるのは千代氏自ら図柄を描いた「3. 絵更紗扇子」です。絵更紗とは木綿地に異国風の模様を型染した染織品で、3はそれを模して地紙に描いて

1. 「本因坊歴代小象」扇子
2. 白檀透かし彫り扇子
3. 絵更紗扇子
4. 蔦模様扇子

います。千代氏は60代から元井三門里の絵更紗を手本に制作を開始し、扇面画のほかにも、色紙、短冊、はがき、着尺、額装、衝立などの作品を手掛けています。手作りならではの淡く軽やかな色彩が魅力的で、夏らしい爽やかな印象の扇子です。(平)



帯・帯地



ろ
5. 白紹地手描き染め扇模様帯 (左)

あさはなだ せいがいほ
6. 浅縹紹地青海波扇模様帯地 (右)

共に昭和戦前期の帯と帯地です。

白紹地手描き染め扇模様帯は、大阪住吉に暮らした大正生まれの女性の名古屋帯です。扇面には異国情緒を醸す花更紗、楓、花唐草や桔梗が、手描きの瑞々しい筆跡で描かれています。

浅縹紹地青海波扇模様帯地は、京都府立女子専門学校の教材であった帯反物です。青海波の拡大された一部ととれる扇面には、鹿の子絞りや朱濃淡色の扇型と花々が描かれた上に、刺繍と銀箔で立体的な表現がなされています。(森)



長着 (振袖)



ちりめんじうちわ

7. 縮緬地団扇散らし模様振袖

赤と紺の団扇が全体に散らされた振袖で、団扇には萩や撫子、桔梗、葛など主に秋草が配されます。

団扇の原型となるものが中国から伝来したのは古代にまで遡ります。そして平安時代になると、団扇は日本独自の扇子へと発展して普及し、絵巻物などにも描かれるようになります。さらに戦場で用いる軍配や信仰の道具としても展開していきました。江戸時代には団扇の画面に絵が描かれた「絵団扇」が人気を博し、浮世絵などにも美しい団扇を使う人の姿をみることが出来ます。また縁起物として好まれる扇面模様と同様、本資料のように着物の模様としても多用されました。(並木)

※参考文献

・『共感のちから 無名のちから—明治・大正・昭和を生きた人々の手芸品—』
(武庫川女子大学資料館 平成 23 年度 秋季展覧会図録 生活文化玉手箱 シリーズ②), 武庫川女子大学資料館, 2011 年

次回の展示は、9月頃からを予定しています